

第25回タンデム加速器及びその周辺技術の研究会を開催

●年代測定総合研究センター

年代測定総合研究センターは、7月20日(金)、21日(土)の2日間、野依記念学术交流館カンファレンスホールにおいて、第25回タンデム加速器及びその周辺技術の研究会を開催しました。

同センターは、国内のタンデム加速器実験施設の1つとして学術研究や教育に貢献し、貴重な研究成果を国内外に



タンデム加速器実験施設見学の様子

発信するとともに教育成果をあげています。今回は、国内のタンデム加速器実験施設の研究者が本学に集い、施設維持や研究推進に関わる問題点及び研究成果を発表し、情報交換を行いました。口頭発表が26件、ポスター発表が8件あり、また同センターのタンデム加速器による放射性炭素年代測定施設が公開され、多数の見学者がありました。

特別講演では、高嶋圭史シンクロトン光研究センター教授及び岡本 渉同センター技術専門職員が、「中部シンクロトン光利用施設の紹介と現状」と題し、中部地区の大学、産業界、行政の協力により推進されているシンクロトン光利用施設の設置・調整の現状を紹介しました。さらに増田公明太陽地球環境研究所准教授は、「炭素14と宇宙線変動」と題し、同センターの放射性炭素年代測定施設を利用した研究成果を紹介しました。今年6月に、過去における大気中の炭素14濃度の急激な変動に関する増田准教授らの研究成果が科学雑誌「Nature」に発表されており、国内外から注目されているところです。

研究者、学生及び一般の方など、計95名の参加があり、活発な質疑応答、意見交換が行われました。研究会の報告書は後日出版される予定です。

第81回防災アカデミーを開催

●減災連携研究センター

減災連携研究センターは、7月20日(金)、環境総合館レクチャーホールにおいて、第81回防災アカデミーを開催しました。

同センター兼任教員である窪田由紀教育発達科学研究科教授が、「心理学で危機に備える」というタイトルで講演を行い、阪神・淡路大震災以降社会的にも注目されはじめ

た災害、事件・事故後の心理的ケアに関する話題をはじめとして、心理学の立場から災害予防に寄与する方法論について話しました。心理的ケアについては、心的外傷後ストレス障害(PTSD)に関する正しい知識の理解や、心理的危機からの回復にとって重要な留意点を述べ、どのように被災者をサポートすれば良いかを具体例をもとに説明しました。

また、「こころの減災能力育成」として窪田教授が取り組んでいる防災教育プログラムを紹介し、事例として、映像教材を用いて巨大地震発生時の諸現象を理解した後に10秒呼吸法を実践し、日々の生活と周囲の人々との関係の見直しが特に重要であることが確認されました。

来場者は90名にのぼり、会場からは、防災教育プログラムの具体的対象の目安や啓発に用いる素材の内容などをめぐって、活発な質疑応答が行われました。



質疑応答の様子

高大連携高校生防災教育推進事業「高校生防災セミナー」を開催

●減災連携研究センター

減災連携研究センターは、7月24日(火)、25日(水)、30日(月)、31日(火)の4日間、環境総合館レクチャーホール及びES総合館ESホールにおいて、高大連携高校生防災教育推進事業「高校生防災セミナー」を開催しました。

同セミナーは、大人になった時に巨大地震などによる大災害を経験するであろう高校生に、災害発生の科学や減災



NPOによる災害図上訓練の様子

対策、災害と付き合う知恵、そして、逞しく「生きる力」を学び取ってもらい、自立して活動できる防災リーダーになってもらうことを目的として開催しており、夏休み中の4日間の座学・実学による学修と2学期の実践活動、年末の活動成果発表会から構成されています。今年度は県内の高等学校15校から、高校生・教員合わせて75名が参加しました。

夏休み中の4日間のセミナーでは、減災連携研究センター関連教員による地震や津波災害の発生メカニズムやその対策、災害を大きくする地理的要因、災害時の心理に関する講義、愛知県による防災行政に関する講義、また、NPOによる災害図上訓練、防災ボランティアの役割に関する講義や、各学校での防災活動のアクションプラン作成のワークショップなどが行われました。

31日(火)の午後には、昨年度より参加しているⅡ期生の成果報告と今年度から参加したⅢ期生の計画発表が行われました。ESホールはほぼ満席で、地元自治体の防災担当者も加わり、同センター教員や防災担当者との質疑応答が活発に行われました。12月27日(木)には、高校生防災フォーラムを開催し、代表校による活動発表やグループ発表、意見交換などが行われる予定です。

防災講演会あいちを開催

●減災連携研究センター

減災連携研究センターは、7月29日(日)、豊田講堂において、気象庁、名古屋地方気象台、愛知県、名古屋市との共催で、防災講演会あいち「津波から生き残るために!」を開催しました。同講演会は、東日本大震災を教訓として津波災害から命を守ることを目的に開催したもので、500名の参加がありました。



講演会の様子

小林壯行愛知県防災局長、福和減災連携研究センター長のあいさつの後、第1部では、水谷法美同センター教授が、伝搬速度・屈折現象といった津波のメカニズム・性質を正しく理解して有効な対策を講じていくことの重要性について説明し、永井 章気象庁地震津波監視課長からは、東日本大震災時の津波警報発令の時系列について、第一報目があまりに小さかったため避難に結びつかなかったことを課題とし、短時間で地震規模をより正確に把握する手段を整備するとともに、警報の表現も避難を促すような特別な表現を入れることで改善していくとの話がありました。

続いて第2部では、福和センター長をコーディネータとして、三輪弘光名古屋市防災危機管理監、清水幹夫NHK名古屋放送局報道部長、栗田暢之NPO法人レスキューストックヤード代表理事、近藤ひろ子同センター防災教育アドバイザーの4名によるパネルディスカッションが行われました。次世代の防災人材をいかに育てるか、また南海トラフ地震が発生した際に助かるにはどうすれば良いかといった点について意見発表や議論を行い、命を守る行動について考えました。

「育もう！子どもたちの元気な笑顔を！」を開催

●減災連携研究センター

減災連携研究センターは、8月11日(土)、豊田講堂において、東日本大震災復興応援企画実行委員会との共催で、東日本大震災復興応援企画「育もう！子どもたちの元気な笑顔を」を開催しました。

約1,000名の方が来場した同企画では、初めに、本学の学生サークルによって、復興への願いを込めた威勢のい



ミュージカル上演の様子

い「はねこ踊り」が披露されました。はねこ踊りは、宮城県を代表する民俗芸能として、無形民俗文化財に指定されている踊りです。その後、栗田暢之 NPO 法人レスキューストックヤード代表理事と、福和減災連携研究センター長が、東日本大震災から1年5カ月経た今でも元通りの生活を送れない方々を、今後も愛知からしっかり支援していきたいと話しました。

次に、愛知県へ県外避難している子どもたちの作文の朗読がありました。小中学生の女の子5人から、生きる意味を自分自身で問うたこと、放射能の風評でいじめられないか悩んだこと、そしてやっぱり家族は一緒に一番幸せだということなどが朗読され、参加者の胸を打ちました。

メインイベントは宮城県七ヶ浜町のミュージカル団体「NaNa5931」によるミュージカルでした。東日本大震災の実話をもとにしたもので、残された人々が強く生きることと復興支援への感謝をテーマに熱演されました。

最後に、愛知県内の子どもたちによる合唱があり、フィナーレは出演者・来場者全員で「今日の日はさようなら」を歌いました。

グローバル COE 第5回国内シンポジウムを開催

●グローバル COE プログラム「機能分子医学への神経疾患・腫瘍の融合拠点」

グローバル COE プログラム「機能分子医学への神経疾患・腫瘍の融合拠点」は、7月19日(木)、中央診療棟3階講堂において、第5回国内シンポジウム「精神・神経疾患研究の未来を切り拓く新機軸」を開催しました。

シンポジウムでは、学内外の8名の講演者から、日本人統合失調症患者の全ゲノム解析による病因遺伝子の解明・

治療法開発、特定の遺伝子異常により発症する自閉症治療のためのオキシトシン補充療法、アルツハイマー病やパーキンソン病などの神経変性疾患及び大脳皮質形成異常の分子病態解明とそれに基づく動物モデルを利用した治療法開発、さらにそれらの臨床応用など、様々な角度から最近の研究の進歩が紹介され、将来への展望が広く議論されました。さらに、岸本忠三大阪大学免疫学フロンティア研究センター教授による特別講演では、インターロイキン6の自己免疫疾患の発症への関わり及び発症機構に基づく治療法の開発について紹介されました。

医学部だけでなく、生理学研究所、基礎生物学研究所、愛知県がんセンター、国立長寿医療研究センターなど、近隣の関係する研究機関からも若手研究者をはじめとする多くの参加があり、総数は203名にのびりました。大学院生などからも研究の詳細な内容について活発な質疑があり、大変盛況でした。



シンポジウムの様子